

東チナンテク語の格配列

日本言語学会第 164 回大会 (オンライン) 2022 年 6 月 18 日

中本 舜 (メキシコ国立自治大学メソアメリカ研究科博士課程)

e-mail: shun@nakamoto-family.org

要旨: 東チナンテク語 (オトマンゲ語族チナンテク語派、メキシコ・オアハカ州) の述語人称標示においては語幹交替による内部屈折、接尾辞、エンクリティックが用いられ、以下の 3 種の格配列が共存する体系であると分析することができる: (i) 語幹交替は動作者の自動詞唯一項 (S_A) および他動詞動作者項 (A) の人称、いわゆる動作者性に対応する。(ii) 一部の接尾辞およびエンクリティックは自動詞唯一項 (S) ないし他動詞動作者項 (A) の人称、いわゆる主語に対応する。(iii) 残りの接尾辞は被動的自動詞唯一項 (S_P) ないし他動詞被動者項 (P) の有生性、いわゆる被動者性に対応する。ただし、他動詞の有生性標示の有無が人称階層に影響される (逆行現象) 北チナンテク諸語と異なり、東チナンテク語の有生性標示は人称階層に影響されない。

1 チナンテク語の格配列

東チナンテク語はチナンテク諸語 (オトマンゲ語族) の一つで、メキシコ南部オアハカ州ララナ郡、ホコテペク郡、ペトラパ郡周辺で全年齢にわたる 2 万人強の話者を抱え、音韻論的・形態論的に保守的な方言の一つとされる (cf. Rensch 1989:5, 27)。チナンテク諸語は相互意思疎通の不可能な 10 以上の言語ないし方言となり、音韻論や膠着的形態論に方言差が認められるが、主要部標示、有生性一致、動詞語幹の内部屈折による人称・アスペクト標示など主要な形態統語論的特徴は共通する。しかし、格配列は対格型 (Castellanos Cruz 2014)、能格型 (Foris 1993; Merrifield 2008)、対格性と能格性の併存 (Castillo Martínez 2012; Palancar 2015) など様々に記述されてきた。たとえば、東チナンテク語ララナ方言の下例は一見対格性を支持する。(1) の自動詞唯一項 (以下 S) と他動詞動作者項 (以下 A) は同じ語幹交替・接尾辞 (cf. 1SG -jn) により標示される。同様に、(2) の S と A も同じエンクリティックにより標示される (cf. 1SG =na) *1。

- | | | | |
|--------------------------|------------------------|------------------------|-----------------------|
| (1) a. | b. | c. o:ʔ ¹² | d. hme: ²¹ |
| a:ʔn ³¹ | hmem ³¹ | o:ʔ ¹² | hme: ²¹ |
| o:ʔ ³¹ -jn | hme: ³¹ -jn | ICP: 泣く:3 | ICP: する:3 |
| ICP: 泣く:1SG-1SG | ICP: する:1SG-1SG | ‘彼は泣く (自)’ | ‘彼はする (他)’ |
| ‘私は泣く (自)’ | ‘私はする (他)’ | | |
| (2) a. | b. | c. siteʔn ² | d. hi: ¹² |
| siteʔ ² na | hi ¹² na | si-teʔn ² | hi: ¹² |
| si-teʔn ² =na | hin ¹² =na | ICP-落ちる:AN:3 | ICP: 叱る:3 |
| ICP-落ちる =1SG | ICP: 叱る:1SG=1SG | ‘彼は落ちる (自)’ | ‘彼は叱る (他)’ |
| ‘私は落ちる (自)’ | ‘私は叱る (他)’ | | |

一方、(1a) と (2a) が異なる語幹交替・接尾辞・エンクリティックで標示されることに形態統語論的な意義があるか、あるいは屈折クラスによるかという点は議論がある (cf. Castillo Martínez 2012; Palancar 2015)。

本発表は、ララナ郡およびホコテペク郡での調査滞在によって得られた 388 の動詞語彙と語彙毎最大 17 の活用形の分析に基づき、語幹交替が S_A/A 人称を、接尾辞 -jn が S_P/P 人称の有生性、その他の接尾辞とエ

*1 なお、例の 1 行目は表層形、2 行目は形態素分析、3 行目は形態素ごとの逐語訳、4 行目は訳に相当する。転写中の数字は声調に対応し、/4/が最も高い。右肩に数字のない音節は声調未指定である。

ンクリティックが S/A 人称^{*2}を標示する独立の形態統語論的手段であり、この三者が共存しながら意味的動機が不透明になりつつあるのが東チナンテク語の動詞活用であると主張する。本研究は有生性標示を S/P でなく S_P/P とする点で Rupp (1989); Foris (1993); Castillo Martínez (2012); Palancar (2015) などとは異なる。また、語幹交替を副次的なものではなく S_A/A を標示する独立の形態統語論的手段として扱う点で、キオテペク方言を記述した Robbins (1968:94) や同オトマンゲ語族のポポロカ語派 (Nakamoto 2016, 2020) やサポテク語 (Uchihara and Gutiérrez 2020) の近年の分析と軌を一にする。

本発表の構成は以下の通り：§2では S/A 人称に基づく動詞活用パターンを整理し、動詞活用において動作者性と有生性の果たす役割を指摘する。§3では東チナンテク語のような状況が動詞分類の方法論一般にどのような意義を持つかを議論する。§4に結論を述べる。

2 動詞クラス

東チナンテク語は (3) のような述部構造を持ち、本節では太字部分を取り扱う。「2P」は第二位クリティック (cf. Wackernagel 2020) に対応する。なお、クリティック後の「P」「A」は東チナンテク語が VOS 語順であることによる。

(3) 移動・相-態-動詞語根-適用 -{S ないし P 有生/A1SG/2SG} =2P =S/A 人称・数 # P # A

東チナンテク語において S/A による人称活用をする動詞は、活用パターンに基づいて表 1 の (i) ~ (iv) の 4 つに分類できる。「語幹 1 ~ 4」は分節音交替、声調交替および補充法による morphomic な (i.e. 形態統語論的に動機づけられていない) 語幹交替パターン (cf. Aronoff 1994; Stump 2016:120) に対応し、「声調 1, 2」は声調交替による語幹交替パターンに対応する^{*3}。

表1 人称標示クラス

	(i)	(ii)	(iii)	(iv)
S/A 1SG	-jn; 語幹 1	=na; 語幹 1	=na	-jn ³¹
S/A 2SG	-jn; 語幹 2	=ni; 語幹 2	=ni	-jn ²³ ...=ni
S/A 3SG	∅; 語幹 3	∅, -jn; 語幹 3	-jn	(-ʔ); 声調 1
S/A 1IN	=raʔ ¹⁴ ; 語幹 4	=naʔ ¹⁴ ; 語幹 4	=naʔ ¹⁴	=raʔ ¹⁴ ; 声調 2
S/A 1EX	=ra ² ; 語幹 4	=na ² ; 語幹 4	=na ²	=ra ² ; 声調 2
S/A 2PL	=raʔ; 語幹 2/3/4	=naʔ; 語幹 2/3/4	=naʔ	-jn ²³ ...=naʔ
S/A 3PL	=teʔ; 語幹 3	=teʔ; 語幹 3	=teʔ	(-ʔ)=teʔ; 声調 1

以下の表 2 に動詞活用の一例を挙げる。動詞クラス (i), (ii), (iv) は接尾辞やクリティックに加えて語幹交替を用いるのに対し、(iii) はクリティックのみによって人称を標示する。(ii) に属する動詞は、A 人称が 3 人称の場合のみ P の有生性一致を起こす (cf. §2.2)。接尾辞の /j/ による $\emptyset > u, o > a$ などの母音交替は Mugele (1976); Rensch (1989:21-22) を参照。

^{*2} S は自動詞唯一項、A は他動詞の動作者項、P は他動詞の被動者項、S_A は動作者的 S、S_P は被動者的 S を表す (cf. Dryer 2007)。

^{*3} 動詞クラス (i) は近いレアオ方言を記述した Rupp and Rupp (1996:422) のクラス I ないし Rensch (1989:22-24) の再建による「単純語幹」に、(ii) と (iii) は Rupp の II ないし Rensch の「*_j 語幹」に、(iv) は Rupp の IV ないし Rensch (p. 24) の「少数の動詞」に対応し、レアオ方言の III に対応する動詞は東方言の (ii) に属する。

表2 人称標示クラス：例

	(i)	(ii)	(iii)	(iv)
	ICP: 吹く	ICP: 叱る	ICP: 落ちる:AN	病気だ
1SG	hju:n ³¹	hi ¹² na	siteʔ ² na	dza:m ³¹
2SG	hju:n ¹²	hi ³¹ ni	siteʔ ² ni	dza: ²³ ni
3SG	hjø: ¹²	hi: ¹² (in.), him ¹² (an.)	siteʔn ²	dzo:ʔ ³¹
1IN	hjø:raʔ ¹⁴	hi ³¹ naʔ ¹⁴	siteʔ ² naʔ ¹⁴	dzo: ²³ raʔ ¹⁴
1EX	hjø:ra ²	hi ³¹ na ²	siteʔ ² na ²	dzo: ²³ ra ²
2PL	hjø: ¹² raʔ	hi ³¹ naʔ	siteʔ ² naʔ	dza: ²³ naʔ
3PL	hjø: ¹² teʔ	hi: ¹² teʔ (in.), him ¹² teʔ (an.)	siteʔn ² teʔ	dzo:ʔ ³¹ teʔ

本研究に用いた 388 動詞中、3 人称にしか活用しない動詞が 90 あり、これを除いた 298 動詞のうちクラス (i) 動詞が 161 (54%)、(ii) が 25 (8.4%)、(iii) が 108 (36.2%)、(iv) が 4 (1.3%) 観察される*4。なお、以下では (i-iii) のみに注目し、(iv) は議論の対象としないが、(iv) に属する動詞はいずれも被動者的状態述語である。

先行研究は、(i) に用いられる 1SG, 2SG, 3SGの語尾 -jn, -jn, Ø 系列と (ii), (iii) で対応する人称・数の語尾 =na, =ni, Ø/-jn 系列の違いに着目し、前者が無生目的語を持つ他動詞と相関関係を持つ一方で、後者が有生目的語を持つ他動詞および有生主語の自動詞と相関関係を持つと指摘した (Rensch 1989:22; Palancar 2015; Anderson 2018:59)。たとえば、(4a, 5a) は無生 S/P を、(4b, 5b) は有生 S/P を持ち、有生 S/P を持つ 3 人称 S/A の標示はいずれも -jn を含み、これを有生性標識をみなすことができる。例右の (i) ~ (iii) は活用クラスを示す。

- (4) a. **mitoʔ²** mitoʔ⁴ ‘オレンジが**落ちた**’ (非人称動詞)…無生 S
 b. **miteʔn²** ci:ʔ ‘子どもが**落ちた**’ (iii)…有生 S
- (5) a. **hjø:¹²** trompe:²ta² ‘トランペットを**吹く**’ (i)…無生 P
 b. **hju:n¹²** ci:ʔ dzaʔo: ‘まじない師が子どもに (息を) **吹く**’ (ii)…有生 P

しかし、どの動詞も (4, 5) のように有生性の違いに対応する二つの形を持つわけではなく、持たない場合には相関は特にないとされてきた。例えば、(6a) の hu:ʔ¹² ‘咳をする’ は有生 S を持つが -jn を持たず (活用パターン i)、(6b) の ʔen¹⁴ ‘トウモロコシの粒を芯から外す’ は有生 P を持たないが -jn を持つ (活用パターン ii)。

- (6) a. hu:ʔ¹² ‘咳をする’ (i)
 b. ʔen¹⁴ ‘トウモロコシの粒を芯から外す’ (ii)

この現況に対し、本研究は (ii) と (iii) を動作者性に基づいて区別することで東チナンテク語の動詞分類がより明確になると主張する。§2.1では特定の内部屈折パターンが接尾辞・エンクリティックとは独立した分布を示すことに着目し、ポポロカ語派やサポテク語と同様に動作者性に対応することを示す。§2.2では有生性一致

*4 ただし、このサンプルが決して網羅的でないことはおことわりする。参考までに、Rupp and Rupp (1996) のデータによる Palancar (2015) の研究では、人称活用する 848 動詞のうち東方言の (i) にあたる動詞が 24.7%、(ii) と (iii) にあたる動詞が区別されずに計 73%、(iv) にあたる動詞が 2.3% 報告されている。

に統語論的制約があることを指摘し、先の動作者性とこの統語論的制約を考慮すれば自動詞の有生性を予測するために屈折クラスに頼る必要がないと主張する。§2.3ではこの節をまとめる。

2.1 語幹交替を起こすこと自体が動作者人称の標示である

チナンテク語の先行研究は、まず接辞やクリティックのパタンに基づいて動詞を分類し、のちに語幹交替のパタン一つ一つを活用クラスとして扱う点で一致している。しかし、本研究では、非派生動詞においては語幹交替を起こすこと自体が動作者的動詞であることを示していると主張する。東チナンテク語では、-jn, -jn, Ø 系列の動詞は非派生動詞でありおしなべて語幹交替を見せるのに対し、=na, =ni, Ø/-jn 系列の動詞は語幹交替を見せるものと見せないものがあり (cf. Rupp and Rupp 1996:452)、本稿ではこれを (ii) と (iii) として区別する。

(7) にクラス (ii, iii) の代表的な動詞を挙げる。=na, =ni, Ø/-jn を用い人称による補充法的語幹交替を起こす動詞 (7a) は他動詞を多く持つが、有生性に限らず補語に影響を与える動詞を多く含む。一方で、語幹交替を起こさない動詞は、使役 mi-, 非人称 si-, 起動 sila-, 結果 ri-, 適用 -ʔ (および声調交替) によるヴォイスの派生を経ていない動詞と経た動詞を区別することで意味的相関を見ることができると言える。ヴォイスの派生を経ていない語根動詞 (7b) は状態述語、心理動詞、身体機能動詞などを表すが、ヴォイスの派生を経た動詞 (7c) にそのような意味的傾向はなく、これら派生動詞において S/P は有生であるが、他動性についての制限はない。

- (7) a. =na, =ni, Ø/-jn を用い、人称による語幹交替を起こす動詞 (クラス ii) :
 siʔ 「～に言う」、ʔen¹⁴ 「トウモロコシの粒を芯から外す」、kō:³¹ 「拾う (an.)」、co:ʔ³¹ 「持ち上げる (an.)」、tin³¹ 「もぎ取る」、ci:n³ 「切り込みを入れる」、si:ʔ¹² 「引きずる」、ʔi:n¹⁴ 「引く」、i:ʔn¹⁴ 「挽く」、hi:n¹ 「入浴させる (an.)」、hi:(n)¹² 「叱る」、ce:n³¹ 「炙る」、jo:n¹² 「絞る」、hjeʔn³¹ 「殺す」など
- b. =na, =ni, Ø/-jn を用い、人称による語幹交替を起こさない動詞 (iii) ; ヴォイス非派生動詞 :
 ta:n³¹ 「付いている (an.)」、ca:n¹² 「金持ちである」、kwim³¹ 「知っている」、lə:n 「考える」、gwi:n 「眠る」、hiʔn⁴ 「～が好きだ」 hiʔn¹² 「しゃっくりが出る」など
- c. =na, =ni, Ø/-jn を用い、人称による語幹交替を起こさない動詞 (iii) ; ヴォイス派生動詞 :
 mikje:n 「焼く (an.)」、mihweʔn¹⁴ 「敬う」、siʔin 「収まる」、siləʔa:n² 「酔っ払う」、rika:ʔn¹⁴ 「横たわる」、hwiʔ² 「～に口笛を吹く」、など

つまり、ヴォイス派生を経た動詞を注意深くより分ければ、語根の意味から比較的透明に人称屈折による語幹交替を起こすか否かを見極めることができる。このように、語幹交替によって得られる形ではなく語幹交替の有無自体に意義があり、なかでも動作者的動詞に語幹交替が見られるというのは、同じオトマンゲ語族の他の語派でも報告されている (cf. Nakamoto 2016, 2020; Uchihara and Gutiérrez 2020)。

2.2 3 人称主語に伴う S/P の有生性標示

上例 (6a) の hu:ʔ¹² 「咳をする」や hi:¹² ~ hi:n¹² 「叱る」において、3 人称主語に伴う S/P の有生性が必ずしも接尾辞 -jn で標示されるわけではないことを指摘した。しかし、一定の統語論的・意味論的条件を考慮すれば 3 人称主語の標識を屈折クラスとする必要性はなくなる。

意味論的条件については、§2.1 で述べたとおり、hu:ʔ¹² 「咳をする」を含むクラス (i) 動詞の自動詞を動作

者的動詞として除けば、非動作者的動詞 (Sp) のみが残ることとなる。残りのうち、-jn を伴わない動詞は無生主語を伴うもので、人称活用をするものはクラス (iii) に属する。

統語論的条件については、動詞 hi:¹² ~ hi:m¹² 「叱る」の二つの形が問題となる。「叱る」のように基底の -jn を持たないクラス (ii) の動詞は、同じ節内に明示的な補語がある場合にのみ有生性一致を起こす。たとえば (8a) では hne³ 「私」ないし ci:[?] 「子ども」があるために動詞が接尾辞 -jn を要求し、(8b) では明示的な補語がないために動詞は接尾辞を要求しない。

- (8) a. **rihi:n³** {hne³/ci:[?]} ci:[?]jo:²³
 rihi:³-jn {hne³/ci:[?]} ci:[?]jo:²³
 POT: 叱る-AN {私/子ども} おばあさん
 ‘おばあさんは {私/子ども} を叱る’
- b. **rihi:³** ci:[?]jo:²³ cini riko:³¹ra² cizi:¹² kje:[?]¹²
 rihi:³ ci:[?]jo:²³ cini riko:³¹=ra² cizi:¹² kje:[?]¹²
 POT: 叱る (INAN) おばあさんもし POT: 遊ぶ:1PL=1IN 庭 POSS3
 ‘おばあさんはもし彼女の庭で私たちが遊んだら叱る’

このように統語論的に条件づけられた有生性一致は他の人称では起こらない。たとえば、1人称主語の (9) では、他の条件こそ (8) と同じだが、動詞 rihi:¹²na⁴ 「私は叱る」は形を変えない。

- (9) a. **rihi:¹²na⁴** te:[?]ci:[?]
 rihi:m¹⁴=na te:[?]=ci:[?]
 POT: 叱る:1SG=1SG PL= 子ども
 ‘私は子どもたちを叱る’
- b. **rihi:¹²na⁴** cini riko:³¹ cizi:¹² kja
 rihi:m¹⁴=na cini riko:³¹ cizi:¹² kja
 POT: 叱る:1SG=1SG もし POT: 遊ぶ (3) 庭 POSS1SG
 ‘私はもし私の庭で遊んだら叱る’

この現象は、3人称にのみ起こる点で逆行環境 (i.e. 3人称 >SAP, obviate>proximate) で有生性一致を失うソチアパンやウシラなど北方言 (Foris 1993:376-381; Skinner and Skinner 2000:498-499) と共通しているが、東チナンテク語における有生性一致の揺れは人称階層に影響されるわけではない点で北方言と異なる。

つまり、3人称の有生性一致は自動詞においては Sp についてのみ起こり、クラス (ii, iii) における P の有生性一致は統語論的条件を考慮すれば予測可能であるため、屈折クラスを立てる必要がない。

2.3 節まとめ

この節では、派生形態論や動詞のより細かい意味的分類、また統語論的記述に踏み込むことで、東チナンテク語の人称による語幹交替や有生性の標示がより明確になると主張した。

3 動詞分類：格配列、動詞クラス、屈折クラス

本研究における動詞分類は、語根からなる動詞を派生動詞と区別する点で、厳密に格配列のみを扱ったものではない。また、語幹交替によって得られる形を網羅的に扱わない点で屈折クラスの記述ではなく、中間に位

置する形態統語論的な動詞クラスの記述であるといえる。

このような作業は格配列の記述に不可欠である。なぜなら、他動性以外の形態統語論的振る舞いを観察することでより細かい一般化を得ることができるからである。一方で、動詞クラスの記述は屈折クラスの設定の前段階になければならない。形態統語論的に説明できることを文法的含意ないし相関を持つ形態論的パターンとするのは端的に記述不足といえる。

4 結論

この発表では、東チナンテク語の述語標示に用いられる語幹交替、接尾辞およびエンクリティックの分布を記述し、動詞語彙を人称標示に応じて分類した。従来のチナンテク語の記述では接尾辞・エンクリティックがS/A 人称に対応することが指摘されてきたが、本研究では加えて語幹交替が語根動詞の動作者性に基づくことを指摘した (§2.1)。また、接尾辞 *-jn* が自動詞の有生性に対応するのは被動者的 S の場合のみであるため、有生性の標示は S/P でなく S_P/P に対応すると指摘した (§2.2)。

略号

1, 2, 3...1, 2, 3 人称; AN...有生; EX... (1 人称) 除外; ICP...未完了; IN... (1 人称) 包括; INAN...無生; PL...複数; POSS...所有者; POT...未然; SG...単数

謝辞

この発表は、Armando Hernández 氏による集中講義 “Curso introductorio del chinanteco de Lalana” 用に発表者が用意した資料 “Unidad 06: Verbos” (未発表) に基づく。調査の一部は Jacobs Research Funds group grant “Lalana Chinantec narratives on a Mesoamerican calendar” (PI: 中本舜) およびメキシコ国立自治大学 (UNAM) から PAPIIT IN404019 “La complejidad paradigmática y tonal de las lenguas otomangues” (PI: 内原洋人) による助成を受けた。

参考文献

- Anderson, Judi Lynn. 2018. *Gramática del chinanteco de Santiago Comaltepec, Oaxaca*. Mexico City: Instituto Lingüístico de Verano.
- Aronoff, Mark. 1994. *Morphology by itself: Stems and inflectional classes*, volume 22. MIT press.
- Castellanos Cruz, Miguel. 2014. Complejidad fonológica en el chinanteco de Quiotepec: nasalidad, fonación y tono. Master’s thesis, Centro de Investigaciones y Estudios Superiores en Antropología Social (Mexico).
- Castillo Martínez, Rafael. 2012. El sistema tonal del chinanteco de Quiotepec, Oaxaca. Master’s thesis, Centro de Investigaciones y Estudios Superiores en Antropología Social (Mexico).
- Dryer, Matthew S. 2007. Clause types. *Language typology and syntactic description* 1:224–275.
- Foris, David Paul. 1993. A grammar of Sochiapan Chinantec. Doctoral Dissertation, The University of Auckland (New Zealand).

- Merrifield, William. 2008. A grammar of Tlatepuzco Chinantec. Manuscript available at <https://mexico.sil.org/resources/archives/52098>.
- Mugele, Robert L. 1976. Lalana Chinantec y- why? *Work Papers of the Summer Institute of Linguistics, University of North Dakota Session* 20:1–38.
- Nakamoto, Shun. 2016. The morphology of person in Temalacayuca Popoloca (Ngiwa). BA thesis, Tokyo University of Foreign Studies.
- Nakamoto, Shun. 2020. Tonología mazateca: San Bartolomé Ayautla. Master's thesis, Universidad Nacional Autónoma de México.
- Palancar, Enrique L. 2015. A mixed system of agreement in the suffix classes of Lealao Chinantec. *Morphology* 25:29–62.
- Rensch, Calvin R. 1989. *An etymological dictionary of the Chinantec languages*. Dallas: Summer Institute of Linguistics.
- Robbins, Frank Ernest. 1968. *Quiotepec Chinantec grammar (Papeles de la Chinantla IV)*. Mexico City: Museo Nacional de Antropología.
- Rupp, Jaime, and Nadine de Rupp. 1996. *Diccionario chinanteco de San Juan Lealao, Oaxaca*. Tucson: Instituto Lingüístico de Verano.
- Rupp, James E. 1989. *Lealao Chinantec syntax*. Dallas: Summer Institute of Linguistics and University of Texas at Arlington.
- Skinner, Leonard E., and Marlene B. Skinner. 2000. *Diccionario chinanteco de San Felipe Usila*. Mexico City: Instituto Lingüístico de Verano.
- Stump, Gregory. 2016. *Inflectional paradigms: Content and form at the syntax-morphology interface*, volume 149. Cambridge University Press.
- Uchihara, Hiroto, and Ambrocio Gutiérrez. 2020. Subject and agentivity in Teotitlán Zapotec. *Studies in Language* 44:548–605.
- Wackernagel, Jacob. 2020. *On a law of Indo-European word order: Über ein Gesetz der indogermanischen Wortstellung*. Berlin: Language Science Press.